災害時のエコノミークラス症候群に対する一般市民の認知度と予防意識に関する調査

◎關谷 暁子[1)]、矢島 梨沙子[1)]、吉田 琉梨佳[1)]、今井 咲[1)]、田中 陽菜[1)]、田尻 慎太郎[1)]、油野 友二[1)]
学校法人北陸大学[1)]

【背景と目的】

災害時の避難生活中における深部静脈血栓症（DVT）および肺塞栓症（いわゆるエコノミークラス症候群）は重大な健康問題であり、個々人による予防が重要である。本研究では、一般市民がエコノミークラス症候群に関する知識と予防意識をどの程度有しているか調査した。

【方法】

医学の専門的な教育を受けたことがない10～70代の一般の方々267名を対象とし、Webフォームまたは質問紙によるアンケート調査を実施した。

【結果と考察】

DVTの症状に関して、「下肢の痛み」「だるさ」「腫脹」では約40%、「色の変化」では約80%の人が「知らなかった」と答えた。肺塞栓症の症状に関して、「息苦しさ」「胸の痛み」では約65%、「歩行時の息切れ」「突然の意識消失」では約80%の人が「知らなかった」と答えた。エコノミークラス症候群の原因に関して、「長時間不動」「脱水」は70%以上が「知っていた」のに対して、「加齢」「肥満」は約50%、「妊娠」「けがや骨折」では70%以上の人が「知らなかった」と答えた。DVTの予防法に関して、「足の曲げ伸ばし運動」「散歩や体操」「ふくらはぎのマッサージ」「水分の十分な摂取」は70%以上が「知っていた」のに対して、「弾性ストッキング」は約60%の人が「知らなかった」と答えた。日常的な血栓予防策の実施に関して、40歳以上では約30%の人が「行っている」と答えた。血栓予防策に関する情報源は、すべての年代において「テレビ」が最も多かった。次いで、50歳未満では「インターネット」が多いのに対し、50歳以上では「雑誌や新聞」が多かった。また、50歳以上では「医療スタッフの説明」も他の年代と比べて多かった。

エコノミークラス症候群の症状や原因、予防法に関する認知度には偏りがあり、その偏りはメディア（特にテレビ）での取り上げられ方や、情報源とする媒体の年齢による違いに起因すると考えられる。平時からの偏りのない知識提供と、積極的な予防法の啓発が重要である。

〔連絡先〕關谷暁子 076-229-1161